



## 論理性を磨くための 学会との関わり

The Role of Academic Societies to  
Enhance Logical Thinking

編集理事 三瓶政一

最近、講演会場に行って話を聞くのとインターネット経由で話を聞くことの違いが話題になる。日本人の場合、インターネットでの参加は、経費的にメリットがある上、実際の参加とほとんど状況が変わらないので得であると考えの方も多い。

それに対して同様の質問を欧米人に問うと、全く異なった回答が得られる。例えば、現在多くの大学で、講義ビデオをインターネットで無償公開している。「有償で提供している講義を無償で公開する理由は何か？」と質問すると、「ビデオを見るだけの場合、質問や議論はできないので、有償で提供している講義の方がその価値は断然高い」という答えが返ってくる。欧米の大学の講義は日本の大学の講義と比べると教員と学生との対話の量が圧倒的に多い。学生は任意のタイミングで質問し、講義は、場合によっては質疑から派生して様々な方向へ展開される。それでカリキュラムは消化できるのかという疑問があるかもしれないが、カリキュラム自体は、膨大な量のホームワークで維持されている。それよりも講義における議論では、学生自身が技術の中身について考え、質問によって理解を深め、議論を通じて技術分野を体系化する能力が非常に高くなっている。

標準化作業などで世界各国の技術者と文書をまとめる際、欧米人の対話力と体系化能力の高さを感じる事が多々ある。国際電気通信連合 (ITU) での文書作成では、全会一致が原則であり、一部の参加者から否定的なコメントが出ると、議論によつての文言修正や、オフラインの会議による見解の調整を経て懸念を解消している。

日本人の技術者にとって最も欠けている能力は、このような対話力と体系化能力ではないかと考えられる。ITUの会議で日本人参加者がまとめている報告書(総務省のホームページで閲覧可能)には、会議で議論が戦わされた場面のやり取りが詳細に記載されており、その際の議論展開のうまさには脱帽することは非常に多い。同時に、日本ではそのような場面を経験したことがほとんどないことにも気付かされる。

「日本人技術者は英語が苦手ゆえに外国人とのこのようなやりとりが苦手である」とよく言われる。しかしながらこれは本当であろうか？ 英語が苦手な日本人が多いことは事実であるが、それより、意見が割れた際の合意形成プロセスで手腕を発揮することが重要であろう。その際最も重要なのは論理体系であり、論理体系がしっかりしている主張をあえて崩してまで前に進もうという人はいない。対話の中で論理性のあるコメントをすれば、相手は必ず「それは正しい」と認めてくれる。交渉ではそこが原点となる。

では論理性を高めるにはどうすればよいのであろうか？ 第1は、常に物事を論理的に分析する不撓の努力を欠かさないことである。加えてもう一つ要素を上げれば、とにかく様々な立場の人と議論する経験を積むことであろう。

学会は、まさに「そのような経験を積める場である」と言えるのではないだろうか？ 論理的に正しいのか誤っているのか、どのような方向性を指向した検討なのか等を、会社の立場を離れ、主に論理性の点から議論できる場所であろう。本会は、年1回ずつの総合大会とソサイエティ大会、それに加えて各研究専門委員会でも多数の研究会が開催されている。このような場はまさに、会社の都合はさておき、技術の論理性を議論する場であり、立場を超えて技術的な議論を交わせる場であろう。

本会が大きく関係している情報通信分野では、マーケットはグローバルであり、最近では製品の製造もグローバルに展開されている。一つの製品を構成することが垂直統合から水平分業にシフトし、会社間の対話なしには実現できない事態ともなっている。情報収集だけでなく、論理性を磨くための学会として、学会との関わり合い方を再度考えてみる時が来ているのではないだろうか？